

との考え方である。ジンメルは、とりわけ三つの経験領域、すなわち、自然経験、運命の経験、そして社会の経験を、宗教を生ぜしめる経験領域として挙げる。ジンメルのこの議論においては、そのアプリオリを特定するジンメルの直観そのものが、既存の宗教、とりわけキリスト教に由来しており、一種の循環論になっていることは否定できない。

③の領域は、生の、あるいは宗教性の存在論とも呼ぶべき主題領域である。ジンメルは、信仰をもつことや宗教的であることは、命題的ななにかの真理性を信じること (Fürwahrhalten) ではなく、存在 (Sein) のありかたであり、ある状態 (Zustand) ないし「状態性 (Zuständlichkeit)」であると言いつ。そうした状態性が受肉する宗教的表象や内容はさまざまでありうる。しかしジンメルにとって重要だったのは、こうした宗教的生のありかたの底に溢れるある種の直接的な生である。それは「この一性、なおまったく他在を知らない宗教的存在の、それ自身に没頭する状態性」である。ジンメルは、こうした状態性を極限概念として、しかし同時に生きるなかで直観しうる事実性として措定した。さらに注意すべきは、この直接的宗教性が生きられることにこそ、ジンメルは宗教の発展の方向を見ている点である。ジンメルは、同時代の宗教進化論を、自己の信仰を絶対化する過ちとして批判する。ジンメルの言い方で言えば、「より完全な宗教」というものは無く、「より完全に宗教」であることが、唯一語りうる宗教の「進化」である。これはジンメルによれば、「最も純粋な意味において現実 (wirklich) 宗教となる無限のプロセス」に他ならない。ここにはすでに、

自らが生み出した形式を絶えずはみ出しながら展開される生の自己超越の運動というジンメルの生の哲学の枠組みが、またそうした枠組みに基づく「生の宗教」ともいべき宗教のヴィジョンが垣間見えると言えよう。

ジンメルの生の宗教のヴィジョンは、一九一二年以降に成立した諸著作において、さらに詳しく論じられるが、この生の宗教が具体的にどのような様相をとるのか、ということは、最後まで明確にはならなかった。ジンメルの宗教論には、決定不可能なさまざまな両義性がつきまとっている。しかし、そうした両義性を、宗教がある未決定なものとして主題となった近代という時代の特質を如実に反映したものであると考えるならば、ジンメル宗教論は、より積極的な今日の意味をもつものとして見えて来るであろう。

ハンナ・アーレントの『人間の条件』再考

——世界への愛——

今出 敏彦

ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-1975) は『全体主義の起源』で一躍有名になったユダヤ人思想家である。彼女の独自性は、公共性概念の形成において、一方で古代ギリシア・ポリス的な「不死への努力」をモデルとし、他方、キリスト教思想の「永遠の命」によって基礎づけられていることであるが、これらは共に、いつかは死ぬ運命の人間にとって究極目標である。では、そのどちらがより究極だろうか？ この問い

に答えようとしたのが、アーレントの「世界への愛」(Amor mundi)である。世界への愛という概念は、キリスト教世界において、神による世界への参与と人間の欲望による現世への執着の二通りに解釈されるが、アーレントは、はっきりと定義しなかった。しかも、彼女はキリスト教の超世界性を批判し、現代世界の特徴を「世界疎外」(World alienation)と規定した。そこで、世界への愛の解明のために、一、「世界疎外」という概念の明確化、二、アーレントのキリスト教理解(批判)の把握、が必要となる。

一 世界疎外とは何か

この概念は、マックス・ヴェーバーとカール・マルクスという二人の偉大な思想家を参考に考案された。ヴェーバーからは「世俗化(脱魔術化)」を、そしてマルクスからは「疎外(資本主義的搾取)」の問題を採り上げた。近代の世俗化は科学技術の進歩と資本主義の発展をもたらす一方、キリスト教の救済の確かさを失わせ、とりわけ資本主義は深刻な経済的格差を生みだし、困窮した労働者から生きる意味を奪っていった。これらの分析をもとに、アーレントは世界疎外を二〇世紀の全体主義の支配の土台であると考えた。

二 キリスト教の伝統的思考枠組の崩壊

アーレントは全体主義的巨悪の分析に際して、一人の人物に注目した。アドルフ・アイヒマン(Adolf Eichman, 1906-1962)である(彼はナチスの幹部で、ユダヤ人のホロコーストの責任者の一人)。彼女はイェルサレム裁判を傍聴し、彼の唯一の特徴が、「自分の行った結果や、その意味を全く考えな

いこと」、つまり「無思考性」(Thoughtlessness)であったことに大きなショックを受けた。これは、キリスト教の伝統的思考枠組の崩壊を意味するものと言える。

世界への愛の意味は、人間が自らの生を自覚し、問いかける能力を喚起することである。我々は死すべき運命にある人間であるが故に、「不死」と「永遠の命」に憧れる。ただ、そのどちらか一方を選ぶことは困難である。何故なら、それは答えの見えない果てしない問いなのだから。しかし、だからこそ、この問いを諦めない可能性が、人間の条件なのであり、この可能性こそが、最も平和を脅かすもの、つまり、無思考性という無理解を抑止する知的営為を保証するものである。

ボンヘッファアの良心論

岡野 彩子

ボンヘッファアの良心論は、聖書的・宗教改革的に方向づけられた人間理解に基づき、神から離反した墮罪後の人間の状態から目を離さない。たびたび自然神学の思潮において良心は、人間の内なる神の声であると主張される。しかし彼はルターと同様に、「自然の光」に対する楽観的な理解を拒否する。そのため「自律的良心」についてはその生涯の初期から、閉じられた思惟の中で自己正当化に傾くものとして批判的である。他方で「他律的良心」には、自律性が犠牲となる危険を見ている。そして後期の著『倫理』に至っては、他律と自律の区別を超え